



大学病院での児童精神医学領域の役割

吉田 敬子 (九州大学病院子どものこころの診療部)

子どものこころの問題への対応は医療領域にも求められている。九州大学病院でも、平成17年から「子どものこころと発達外来」が設立され、精神科医師と心理士、周産期医療や小児医療スタッフで診療を開始した。さらに学内連携を強化して「子どものこころの診療部」を平成21年より設立した。診療対象のうち最も割合の高いのが軽度発達障害を持つ子どもで、全体の70%以上を占めており、かつ多数の子どものほかの発達障害や精神医学的疾患を重複していた。受診経路も小児科領域からが30%~40%と高いが、それに続き、教育機関、そして福祉機関からも高率になっているのが現状である。

これらのこともふまえて演者らは、大学病院の児童精神医学の専門スタッフとして、以下の理念をもって臨床と研究を行っている。①児童精神医学領域では、子どものみでなく養育者や家族の精神医学的な評価とケアや治療が必要である。②乳幼児から青年期まで各年代ごとにみられる心の問

題の特徴をよく把握すること。③かつ、各年代の問題をライフサイクル精神医学の視点でもって縦断的な経過で長期予後を検討し、そこから予防医学的な治療とその効果の検証を行なうこと。④さらに地域のニーズを把握した上で、医療・保健、教育、児童福祉、司法など多領域それぞれの役割分担と協働の治療プログラムを考え、実施し、その有効性と効率性を検証することである。

これらが実現されるには若手医師や心理士の育成が不可欠であり、そのためには教育・研修プログラムと育成に従事する十分数の指導教官が必要である。しかし子どもの精神医学を専門に掲げている大学病院の実態調査を行った結果、教官が数少ない専門スタッフとして診療に追われているのが現実であった。当日は、これらの現実を報告し、今後の大学病院の精神科における工夫と改善点について提言したい。

(この論文は抄録集より転載しました)